

2020. 1. 12 第二主日礼拝

コロサイ 3:12-17「神のみわざを賛美」

聖書

12 ですから、あなたがたは神に選ばれた者、聖なる者、愛されている者として、深い慈愛の心、親切、謙遜、柔和、寛容を着なさい。

13 互いに忍耐し合い、だれかがほかの人に不満を抱いたとしても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。

14 そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全です。

15 キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのために、あなたがたも召されて一つのからだとなったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。

16 キリストのことばが、あなたがたのうちに豊かに住むようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、忠告し合い、詩と賛美と霊の歌により、感謝をもって心から神に向かって歌いなさい。

17 ことばであれ行いであれ、何かをするときには、主イエスによって父なる神に感謝し、すべてを主イエスの名において行いなさい。

はじめに

先週は 2020 年の教会標語「神に向かって歌う」について心を向けました。賛美は神さまの恵みに対する応答であり、神さまへのささげものであることを学びました。ささげものである以上、誰に、何を、どんなふうにするのかということが大切になってきます。礼拝の中でそのようなことを意識していけたら幸いに思います。今日は私たちが神さまを賛美する理由は何かを考えてみましょう。なぜ、私たちは賛美をささげるのでしょうか。

1. 私たちは神さまの目から見てどんな方？

私たちが賛美をささげる理由を見る前に、神さまは私たちのことをどのように見ておられるのかを確かめてみましょう。私たちは自分が人にどう思われているのか気になりますよね。人の目が気になるのはよくわかりますが、人の目だけでなくもう一つ気にしなければならない大切な目があります。それは神さまの目です。多くの人は、人の目は気にしても神さまの目を気にすることはありません。もっと言えば、神さまに見られているという感覚もないので、その目を気にすることもないのは当然です。しかし、私たちが神さまの目を意識しようとせざるとに関わらず、神さまは私たちを見ておられます。詩篇 139 篇には、神さまは私たちの心の中のすべてをご存知で、立つのも座るのも知っているとあり、いつでも私たちにご自身の目を注いでおられるのです。

ここで問題になるのが、神さまの目をどう感じるかということです。見られていることに恐れを感じますか？それとも喜びを感じますか？この感覚は子どもが親をどう思うかという感覚と似ています。私は子どもの頃、寡黙な父親が怖かったです。何かいつも怒られるような感じがして、親しみを感じることはありませんでした。でも、私とは逆の方もおられると思います。「お父さん、お母さんは僕のことをいつもちゃんと見ていてくれる」と、父母の愛の眼差しを感じて育てられた方もおられるでしょう。それはとても幸いなことです。私のように父を怖いとしか感じなかったら、父を喜び、父と共にいることを楽しむことはないでしょう。

そのように、神さまを人間の罪を責める怖い存在とだけ捉えているなら、その方に向かって賛美することはないでしょう。聖書の神さまはそのような方なのでしょう。神さまは人の罪を責め裁きの恐怖を与えるためだけにおられるではありません。神さまは愛です。罪を赦し愛してくださる方です。神さまの愛の眼差しが私たちちゃんと届いていることが、賛美をささげる前提となるのです。

12 節に「あなたがたは神に選ばれた者、聖なる者、愛されている者として…」とあります。神さまは一人一人をキリストにあって救いに選んでくださいました。罪に汚れた者の罪を洗い流し聖なる者としてくださいました。イ

イエスはいのちを捨てるほどに私たちを愛しておられます。神さまが私たちにに向けておられる愛の眼差しを見ることが、今年取り組もうとしている賛美をささげる出発点になります。

2. 赦しの恵みに感謝して賛美する

もし、神さまの愛の眼差しが分からない方がおられたら、遠慮なく声をかけてください。分かるようにお祈りしましょう。

神さまの愛はキリストの十字架によって表されました。人は生まれながらに罪人です。善を行いたいと思っても悪を行ってしまう天邪鬼です。ひと言、ありがとうと言えば良いのにそのひと言が言えなかったり、また言わなくてもよいことばを発して人を傷つけてしまったり、自分で自分を持って余している愚かな罪人です。年を重ねれば重ねるほど実に人間とは罪深い者であることを思い知らされます。

イエスはそんな罪深い私たちの罪を取り除くためにこの世に来られた救い主です。ご自分が私たちの罪の刑罰を背負い、十字架で死んでくださったことにより、罪の赦しを宣言してくださいました。それを自覚的に受け入れる人に赦しの恵みは届けられるのです。「あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。…しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。」(エペソ 2:1-5)。罪の中に死んでいた者を救い出し、生かしてくださったイエスさまに感謝します。イエスさまの赦しの恵みに対する感謝こそが、賛美の最大の理由です。

神さまに対する感謝を考えると、しばしばご利益と結びつくことがあります。自分に良くなってくれたら感謝するけれども、そうでなければ感謝はしない、これが普通の感覚ですが、クリスチャンの感謝の理由はそうではありません。良いことがあったかどうかではなく、自分が神さまに赦され、愛さ

れていることが賛美の一番の理由です。十字架の赦しに感謝して生きるとき、赦しを注いでくださったイエスさまを心からほめたたえることができるのです。

3. 神さまの多くの恵みに賛美する

私たちの中にある罪が取り除かれたとき、人の生き方に大きな変化が生まれます。その変化が12-17節に命令形で出て来る一つ一つの事がらです。聖書の中には、「～しなさい」という命令形がたくさん出てきます。これを私たちの努力目標に掲げる人がいますが、それはやめた方が無難です。なぜなら、人の努力によって得られるものではないからです。もし人の努力で神さまの願う生き方ができるなら、聖書も信仰もいりません。しかし、どんなに頑張ってもできないことは私の歩みで証明済みです。頑張っても得られないから、神さまは一方的なプレゼントとして与えてくださったのです。命令形で書かれたものは、願う人にはイエスさまを信じることで与えられる恵みなのだという理解に立って、12-17節の命令形を見てみましょう。「深い慈愛の心」「親切」「謙遜」「柔和」「寛容」「忍耐」「赦し」「愛」「平和」「感謝」「賛美」。これらの一つも自分の努力によっては得られないのに、神さまは信じる者にはプレゼントとしてくださるのです。

これを届けてくださるのは聖霊なる神さまです。私たちは届けられたものを神さまからのプレゼントとして感謝して頂けばよいのです。それをいただくことを「信仰」というのです。信仰によって神さまの恵みをいただき、それを使って生きるとき、人の生き方が変わっていきます。例えば、怒りっぽい人が柔和な心が欲しいと言って祈り求めるなら、柔和な心が与えられるのです。それを使って生活していくうちに、以前の怒りっぽさは消えて、柔和な人に造り変えられていくわけです。この過程は長い時間がかかるかもしれませんが、聖霊との関係を正しく保ち、聞き従っていくなら、必ず得ることができます。

罪赦されて救われることだけでなく、私たちの生き方が変わっていくことに対する感謝、それがさらなる賛美を生み出します。私たちが聖霊によって

変えられ続けていく限り、賛美は絶えることがないのです。

結び

賛美は私たちに与えられた救いの恵みと聖霊による生き方の変化に裏付けられたものです。私たちは何の根拠もなく賛美しているわけではありません。イエスさまの救いの恵みに与ることができたことを感謝して賛美しましょう。聖霊は私たちの内に働いて、私たちを造り変えてくださいます。そのみわざに感謝して賛美しましょう。もっとイエスさまに近く歩むことで、もっと聖霊に従って歩むことで、賛美も増し加わることでしょう。そんな一年となるようにお祈りします。